
BLACK D●T

笹舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLACK DOT

【Nコード】

N9287Y

【作者名】

笹舟

【あらすじ】

『雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生』である主人公。いつものように雨に対して憂鬱を感じていたその日、とあることから『変な名前の』生徒会長と会話をすることになる。

「あ、大丈夫だよ。生徒会長の名にかけて、不純異性交遊なんてしないから」
そう言っただけの彼に手を引かれ、雨の降るなか連れて行かれた先は。

特別なことは何も起こらない、ちよつとしたお話です。
雨の日の暇つぶしにでもどうぞ。

●と私

BLACK DOT

マンガやドラマで、登場人物が雨に打たれて佇むシーンが出てくると、それがどんなに面白い話でも、途端にマイナスな気持ちが浮かんできてくる。正直「馬鹿じゃないの」とさえ思ってしまう。私がそれらの話に登場するとしたら、戦いに敗れてどれだけ悔しさが募っていくようにも、突然恋人に別れを告げられてどれだけ呆然としていようとも、雨が降り出したらずに屋根のあるところまで走るだろう。絶対に。

私は雨が嫌いだ。大、をつけてもいい。

雨についてのトラウマがある、なんて事情は無く、ただ純粹に雨を嫌っている。

朝起きた時に窓に雨が当たる音が聞こえてくると、まず軽く怒りが湧く。登校しなくてはいけない平日は特に、だ。そして靴や制服が濡れることを考えて憂鬱になり、ただでさえ低めだと友人から称されているテンションが下がる。

服や靴だけじゃない、雨になると手に持つ鞆だって濡れてしまう。その鞆の中に本が入っている時なんて、最悪の極みだ。考えただけで嫌になる。私は自他共に認める読書家であり、ついでにいうなら学校では図書委員をしている。

大体、心から雨が好きだという人はそうそう居ないと思う。

中学生の時のクラスメイトの中に「私、雨が好きなの」とか言っていた女子が居た。けれどその子だって、帰り際に雨が降り出した時には「うわ……」と顔を歪めていた。その次に口にした言葉は「親に迎えに来てって頼もうかなあ」だ。

それ以来、雨が好きななどと公言している人を見かけると「それってキャラ作りじゃないの？」と心の中で思うようになった。

本当に雨が好きだという人だってそりゃあ居るかもしれないし、その人には私の考えは失礼だろう。でも、あの時にあのクラスメイトが満面の笑みを浮かべたりなんてしていても、それはそれでドン引きしていたと思う。距離的にも精神的にも確実に。

私の中では、雨が好きと言っていいのはゴキブリが好きと言っているのと同じぐらいだと思っている。極端な例かもしれないけれど、つまりはそれだけ考えが理解し難いということだ。恵みの雨だろうが何だろうが、嫌いなものは嫌いなのである。

ここまで宣言してきた通り、私は雨がとても嫌い。

それだというのに、私の地元では雨がよく降る。

だから私は、私の地元も嫌っている。見事な三段論法だ。

雨と地元を嫌っている、テンション低めの女子高生。

そんな私が、『雨が降る地元の商店街で』、という、あまり芳しくないシチュエーションで出会った店がある。出会ったというか、出会わされたというか、出会わせてもらったというかはとても微妙な境だけど。……それに何の因果だろうか、その店と出会うきっかけをつくった人物は、名前に『雨』という字を冠している人だったりもする。

——さて。

これは、その人とその店に出会ってからの私の話である。

雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生、つまり笠見颯子である私の話。

その私が、それからどうなったか。どうもならなかったのか。月並みで三流、ありがちな言い回しだけど、

——それは読んでのお楽しみ、

אשר יאמר.

六月十日 くもり 時々 ●。

今日で雨へのマイナスイメージが更に上がった。

「最悪だ……」

私は鞆に入れていたタオルを取り出して、本を包んだ。

——今日は朝から曇り空だった。

午前中の降水確率は八〇パーセント。傘はこのあいだ壊れたばかり。今週から新しい靴を履き始めている。シャーペンの芯がもうすぐ無くなるけど、それを除けば今月欲しいものは特に発売されないので、財布の中には余裕がある。

普段は徒歩で学校に向かっている私は、今日はバスに乗ろうと決めた。

バスに乗ると決めたら、家を出るまでの時間に開きが出来た。その間に、先日母さんが買ってきてくれた本を少し読む。第一章がもうすぐで終わるといふ微妙なところで時間になったため、続きはバスの中で読もうと手に取ったままバス停に向かった。

私と同じような考えをしたらしい、バス停には何人かの制服姿が並んでいた。この辺りの住宅地には同じ学校に通う学生が多く住んでいる。

やがてやってきたバスに乗り込み、中央から前よりの席を確保、腰を下ろした丁度その時にバスの窓に雨粒が弾けた。それを皮切りに弱めの雨が降り始める。

家を出る時はまだ降ってきていなかったせいで傘を持ってくるのを失念していたことに気付き、しかしそもそも愛用の傘は踏んで壊してしまっただったということに思い至る。うんざりとしながら、バス停から学校までの一〇〇メートルは走るしかないかと仕

方なく覚悟を決めた。

それからは、持っていた本へとすっかり意識を移して、その内容にのめり込んでいった。商店街の真ん中を走っている時に一度顔を上げた以外は、延々を活字に眼を通して過ごす。

停まる度に学生の増えていったバスが、学校に一番近いバス停（名前もそのまま北第一高校前である）に到着した時には、雨は小雨と呼べる程度にまで弱まっていた。

バスが止まると同時に学生が一斉に立ち上がる。手のひらに準備していた小銭を運賃箱に落として、バスから吐き出されていく。その列の中に揉まれるようにして私も降りた。

私がバスを降りて数歩歩いたとき、いきなり雨足が強くなってきた。

ほんの一〇〇メートルくらい、しっかり抱えていれば大丈夫だろうとタカをくくって、私は手に本を持ったままだった。しかし激しくなってきた雨粒にこれは危険だと判断を変えた。

慌てて本を鞆の中に入れようと道の脇に立ち止まって、

ステップから降りる勢いのまま駆け出した学生とぶつかり、

——私は本を取り落としました。

思わず私は小さく叫んでしまった。「あ、悪い」と一言残して去っていった男子学生に眼は向けず、すぐに本を拾い上げる。指に伝わるふやけたような感触に、頭の奥が重くなる。

数秒だけ鞆に入れるか迷い、それよりもこれ以上雨に打たれないように、とぶつかった男子学生の後を追うように学校に向けて走り出した。走り出した頃には怒りが湧き上がっていたから、その学生が私の方をちらりとでも振り返っていたら、後ろを走る私の表情を見て「殺される!」とでも思っていたかもしれない。

急に立ち止まった私に非が無いとは言わないけど、でも、嗚呼……。

そして今に至り、怒りは哀しみに変化していた。

この時間になると、大体の生徒は登校し終えている。生徒玄関には、本の水気を吸い取ろうとその落とした本を包んだタオルにぎゅうつと力を込めている私の姿しかない。

「ああもう……。ほんとに……。最悪だ……」

ため息をついて、タオルを開いてみる。表紙はすっかり波打っていた。布製の文庫カバーでもしていれば良かったのだが、この本には紙のカバーさえかけていない。

母さんは本を買うときにカバーを断るタイプの人で、母さんが買ってきてくれたこの本もそれに違わない。曰く、「下手な店員がするぐらいなら、むしろ、してもらわない方がいい」らしい。それには私も賛成で、ただし「むしろ」の続きには「自分でする」がつく。だから書店でかけてもらわずにカバーを貰って自分でかけているけど、残念なことに母さんはカバーをすることにこだわってはおらず、わざわざカバーを貰いはしない。

ふやふやになった表面を撫でて、その凹凸に悲しくなる。

何度目かの、最悪だ、を口にしようとした時、

「ああーもおー、そこそこ悪だーっ」

妙なことを叫びながら、アマガエルが飛び込んできた。

——いや、その雨合羽の色合いが見事にアマガエル色だったために、二秒くらいは本気でそう思ったけど、そのアマガエルは、入学してまだ二ヶ月しか経っていない私でも名前を知っている男子学生の姿だった。

理由は二つ、その男子学生は『変な名前』の『生徒会長』だからである。

六月十日 くもり 時々 ●。その2

この北第一高校、通称「北一」は、東高校と県で三番目争いを展開中の進学校だ。

ちなみにもう一つの北高校である北第二高校は、卒業後に就職を考えている生徒が半数を占める総合学科となっている。

しかし、県で三番目（or 四番目）の進学校と言えど、北一はガリ勉が集まったテスト三昧の学びの舎、ではない。私がここに入學したのも、進学を考えてではなかった。

登校にわざわざ駅を超えるのが面倒だったこと、徒歩数十分の場合にここがあったこと、中学三年の時に担任から「北一はどうだ？」と提案されたこと、少々頑張ってみれば学力も何とかなりそうだったこと、学校説明に来た校長先生が良さそうな人だったこと、制服がそれなりに悪くなかったことが重なり、他の高校と並べて考えた末に、私は北一を選んだのだ。

ただしその「勉強漬けではない」というのは、今の私が北一に入りたての新生だから、そう感じているだけなのかもしれない。そこで話はちよつとだけ軸に戻る。

北一の生徒会長は、大体は二年生が務める。

三年になったら勉強の日々、というのは、北一の一年・二年の生徒だけでなく、北一の教員もがよく口にする文句である。

北一では、三年生に進級すると、進学に向けての準備として委員会からも生徒会からも退会するのが、通例になっている（らしい）のだ。部活動は夏にあるそれぞれの大会が終わるまでは所属している（らしい）けど、生徒会長などの役も本人が希望しない限りそこで代替わりをする（らしい）。そして「今までそうだったから、なんとなく」というもの（らしい）とはいえ、通例をわざわざ破っ

てまで役を続けたいという生徒は少ない（らしい）。

すべて、伝え聞いた話によると、である。

これから二年先のことに、私はまだそこまで興味も実感も沸いていない。

で、ようやく本筋に戻るとするとこのアマガエル。――失敬、生徒会長。

彼は北一の二年生で、苗字は中谷といい、名前は雨に里と書いて『うり』と読む。その変わった名前を、新入生のほとんどは入学式から忘れたことが無いだろう。

入学式の歓迎の挨拶の時、彼の名前は呼ばれた。

いつも眠たげな顔をしている教頭の「生徒会長、中谷雨里」という声がマイクを通して体育館に響いた途端、ステージの前に並んだ新入生たちと、後ろの方でパイプ椅子に座っている保護者たちの間には、

「うり？」「名前なの？」「うりって言った？」「読み間違い？」

と、ちよつとした動揺と驚きの声がささめいた。

そんな中、壇上でスタンドマイクの高さを調整し終えた彼は、開口一番、

「変な名前だよね。でも、おかげで覚えてもらえやすいかな」

そう言っ、私たち新入生にニツと笑いかけた。

その後はポケットから紙を取り出して「新入生の皆さん。ご入学、おめでとうございます」と、その紙に書かれているのであろう、よくある言葉が並んだ文章を読み上げ始めたものの、第一声に新入生を歓迎する「ようこそ」でも、新入生を祝う「おめでとう」でもない言葉を向けられるとは思わなかった。

しかもそれが自分の名前を貶す言葉とは。

まあ本人の言うとおり、おかげで入学一日目にして、その名前は
ばっちりと私の記憶に刻み込まれたし、クラスメイトたちも、

「すごい名前だね」

「っていうか、ふつう自分で言う？」

と、インパクトを受けたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287y/>

BLACK D●T

2011年11月29日11時54分発行